

歴史と文化

日韓古代文化交流史論(2)

—楽浪文化流る—

武藤 正行*

四. 樂浪文化、玄海を渡る

樂浪文化は如何にして我国に伝來したかを述べるについて、1916年以降日本の学者調査団の苦心努力によって如何に調査研究が行われて来たか、又樂浪郡は韓国の如何なる地域を指称していたのか。政治文化の中心であった郡治（役所）の変遷、樂浪の遺跡に見る土木技術の水準、樂浪の墳墓群とそれから出土した漢代文化の特色を示す金銀製の美しい装身具、異色あるデザインのすぐれた漆器類等まさに漢代の工芸美術の縮図の感さえある。又それ等の装身具や品々を用いたであろう樂浪官人達の豪奢な生活の実態等探求すべき問題は数多くあるが、樂浪文化流るという動態にメインテーマを求めてるので駒井和愛著「樂浪—漢代文化の残像」を紹介して問題を進めて行くことにする。

西暦313年北の高句麗の征服によって漢文化の伝統を400年伝えた樂浪文化は遂に終止符をうつ事になった。

樂浪の漢人達の若干は高句麗に行き、今日吾々が見ることの出来るすぐれた装飾古墳を残している。一方南に下った漢人達は百濟等に来り百濟文化の花を咲かせると共に、百濟を通して日本の黎明期の古代文化に大きな影響を与えている。

樂浪文化の盛衰興亡が日本の古代文化に深くか

*國立館大学客員教授

かわっていることは大いに注目しなければならないが、樂浪文化流入の現象を流動の姿に於いて広い視野から見たいという願望は持っているが諸種の制約があるので、私の見聞の及んでいる筑紫を中心にその一端を瞥見するにとどめなければならない。

九州には装飾古墳は筑後地方を中心に、南は熊本、北は豊前方面に及んでいる。然も素朴な同心円と幾何模様のあるものから、人物、動物その他の形象を描いたもの等多種多様である。かつて「原色の呪文」の著者であり抽象画家として知られている岡本太郎氏は朱色で大きな同心円を幾つもならべた壁画は太陽崇拜を表現したものとして、原始日本人の素朴な信仰、ダイナミックな芸術感覺に抽象画家らしい大きな感動と共感されていたが、歴史家考古学者の考察でない或る深いものを描くものの立場で、描かれたものを見る見方は、何か斬新なものを感じさせられた思がするのであった。

さて福岡で代表的なものといえば、嘉穂郡の王塚古墳であるが、古墳の下に幾つもの炭を掘った廐坑があり、石室の保存と壁画の色彩の変色に心を痛めた記憶が強く残っている。さて入口の鞍馬をかこむ様に蕨手文様が見え、又小さい円が3個づつ三角形に積みあげられている。これは中国の「説文」に星をその様に表現している。すると蕨手文様はさしづめ雲を現わした事になる。慶州の天馬塚の白樺の皮製の馬具に描かれた馬の下の

蕨手文様も同じく雲を現わしているとなると、馬はまさに天翔ける天馬ということになる。それは遠くシルクロードを経てパミル高原の彼方オリエント文化につながるものといえよう。

今一つ筑後の浮羽郡にある屏風山の別名を持つ水縄山麓地帯は一大古墳群地帯であったが果樹園の開墾によって無数の古墳群が破壊されているが、それでも未だに県立歴史博物館を持たない福岡では自然の歴史博物館といえる程、装飾古墳の多い所であるし、若宮八幡の境内にある古墳には日の丘、古墳月の丘古墳という万葉の世界を連想させる名称のついた古墳がある。

特に珍敷塚古墳の壁画は太陽を円で現わし外に円と「ひきがえる」が描いてある。これは漢代に撰ばれた淮南子の精神訓に「日中に跋鳥あり、月中に蟾蜍あり」と見えているが、跋鳥とは三本足の鳥（太陽の黒点に出すという）月にひきがえるありといわれている。此の図の様式は漢代の画像石に多く高句麗の壁画にも伝っている。

全画面の構成は、幅2メートル高さ1メートル20センチで青色を一面に塗り、赤色の鞍、船、同心円を描き、中央に鞍を三個配列し船の舳に鳥をとまらせ、帆柱もあり、櫂を持つ人物が立っている。鞍の右の方には櫂を持つ人物や月を象徴する蟾蜍があらわされている、鳥のとまる船は死者を送る天鳥船をあらわしたものであろう。これに関連してふと思いついたことがある。

それはかつて国際ペンクラブの世界大会が京都で催されたことがあった。例によって研究発表者は主催国側より出る事になり中国文学、就中杜甫研究の第一人者吉川幸次郎氏が発表される事になった。然し博士はテーマを中国文学からえらばず、中国文学をマスターした日本人の立場から、日本が世界に誇る万葉集の中から柿本人麻呂の一首をあげられた。

詠天 あめを詠める

天之海丹 雲之波立 天の海に雲の波立ち
月之船 星之林丹 月の船 星の林に
榜隠所見 榜ぎ隠る見ゆ

On the Sea of Heaven

The Waves of Clouds, arise
And the Moon Ship is seen, sailing
To hide in the Forest of Stars.

とあり、空は海であり、雲は波であり、月は船で

ある。星の林、即ち銀河の中に月の船の姿が次第にかくれて行くのである。この様な詩の発想法は中國大陸に生活する者からは決して生まれて来ないであろう。海洋に生きる者が自らの生活体験を基にして空想の翼を空に向けて展開した時に生まれるのであろう。

吉川博士は人麻呂の詩の発想法は中国の詩の中には全く見あたらないのであって、純日本の発想法であると説かれ、世界各国のペンクラブの人々に深い感銘を与えられた。中国という異国の文学の研究に生涯を捧げつくした一世の碩学が、世界的視野から日本の古典万葉集を研究して、専門の国文学者、日本史の学者の気のつかないというより、到底探求し得なかった価値観を発見されている。万葉研究者の誰もが見落していた問題である。ここに珍敷塚の古墳の壁画と柿本人麻呂の歌をならべたのは、6世紀の壁画と8世紀の歌集の間に200年の時間的差があって、天鳥船と月の船の間に歴史的因果律を見ることは出来ないがその着想は全く無関係とはたして言い切れるであろうか、駒井博士はその間に「それとなく」つながるもののある事を述べられているので敢えてこの例をとりあげて見たのである。

今一つ福岡県の若宮町の竹原古墳がある、小さな前方後円墳であるが石室の奥壁に高さ1メートル50センチ、幅2メートルの壁面に、北魏の石刻や高句麗の壁画に見られるモチーフで、中央に馬を描き、その左に轡を取っている馬飼の姿があり、馬飼は髪を美豆良に結い、つづぼうの上衣に胡履といわれる先端の尖った靴をはいている。被葬者の姿はないが多分馬上にいるのであろう。小さい船が黒で上部に描かれ蕨手文様は雲を指している。画面の両側に2本の大きな「さしば」が描かれている。後漢の学者鄭玄の註釈に「翫は棺の飾で持つて柩車に従するもの」と言っており「さしば」は多分それに該当するものであろう。要するにこの壁画を描いた画工は高句麗から来たものか韓半島に行ったことのある人達か、いづれにしても楽浪帶方の漢人の伝統を継承した帰化人と深い関係があり、筑紫君の政治圏内の地方の豪族に仕えた学問、技術の士、程度の身分の者の墓と思われる。そして壁画の様式が漢六朝の古風なスタイルを持っているので製作年代は6世紀前半と考えられている。以上は古墳を主として眺めて見たのであ

るが、無形の文化財として、応神天皇の御代百濟の博士王仁が論語千字文を伝えたと日本書紀が述べている。はじめはあまり信頼の出来ない伝承と考えられていたが、今日では単なる伝承の人物でなく楽浪漢人の王狗が百濟に流亡し、その子孫即ち三世に当ると考えられる様になった。ただし彼の伝えた古典が直ちに日本文化に影響を与える程、受け入れ態勢があったかどうかは尚問題が残されている。然し大阪の東南橋本市にある隅田八

幡神社の画像鏡の銘文の場合は別であって、その文のスタイルが古事紀、日本書記の文章を思わせるに足る。日本の書き方というより、むしろその手本となったといえる程立派なものである。その点で志賀島出土の金印は日本最古の文献資料であるにしても漢人の手になるものであるし、当時の奴の国人によって、正しく読解されていたかどうかに疑念が残されているが、この鏡の銘文は完全に倭人に読まれ且つ理解された文章として金印



写真—2 竹原古墳正面奥壁画の画面（福岡県若宮町）

とはいさかおもむきを異にした意味で「日本最古の文章」と駒井博士が断定されているのは理解することができる。この銘文についてはその解釈に問題は残されているが漢字漢文が伝来し日本の訓読、表現が行われはじめた事だけを述べるにとどめよう。

以上の様にして楽浪文化の流入による文化的刺激が吾が国の学芸の芽をはぐくみ、やがて更に中国の江南の技術や文学、北魏の仏教美術や經典類の移入等のもろもろの要素が加わることによつて、國のまほろばと礼讃された大和平野の中核に「青丹によし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり」と絶讃される天平文化の開花期を迎えるに至ったのである。

五. 駒井博士の楽浪文化論への若干の所見

先づ駒井博士の楽浪文化と日本文化とに関する総括的見解を見てみよう、博士は

「樂浪帶方というものが設置されなかつたらば日本の文化はもっと遅れて花を開いたであらうし、樂浪帶方が5世紀6世紀も続いたとしたら、わが国は全くことなつた歴史の運命を歩かなくてはならなかつたであらう。応神天皇の頃から樂浪遺民の子孫ばかりではないが、大陸や半島からの渡來者によって、わが国が物心一如、面目を新たにすることがかなつたのはまことに仕合せなことといえよう。これを可能にしたのが實に縄文以来の國土と人間とであった。この事情をそれとなく語っているのが古事記日本書紀と万葉集である。就中万葉人に見る様な清潔な心が大きな原動力に相違ない」と述べられている。私が長々と駒井説の樂浪論の結論的な部分を引用したのは、これが東洋史家の言であろうかと目を見張る思がしたからである。私が先きに全く歴史的に無関係に見える古墳珍敷塚の壁画と万葉、柿本人麻呂の一首を私が本来の思想史家としての立場から、駒井博士に代つて例をあげ、「それとなく語っている」部分をあげてみたのである。然しここで私なりに蛇足の感はあるにしても若干の所見を述べてみたい。樂浪郡の設置は西暦前108年から崩壊の西暦313年という年代が日本文化の開花に致命的關係を持っていた事を強調している。これは樂浪文化の研究に生涯をかけられたと言っても過言でな

い碩学の言として、又樂浪文化の持つ歴史的価値と歴史地理的ポテンシャル、エナジーを強調されたものとして、その大筋の理論に対して賛意を表明し、理解を示すにやぶさかではない。唯、然し歴史はあくまで一回性 Einmallichkeit の歴史現象の因果関係を探求する學問であつて、自然科学の様に時空を越えての自然現象の繰返しや実験を行うことはできない。又既往に遡ることも出来ないのであってその意味で樂浪文化の盛衰興亡の年代を上下して日本文化の開花の遅速を推論されたのに対して無条件に賛意を表する立場にはない。唯博士の樂浪文化に対する感情の流露として受けとめたい。ただそれにも拘らず、帰化人によって日本に持たされた樂浪文化という物心両面の高度の文化の受容を可能ならしめたものは「縄文以来の國土と人間であった」との論断には大きな驚歎を感じたのであった。東洋史家多しと雖も駒井博士以外の誰がここまで論及したものがあったろうか。

それは和辻哲郎氏の名著「風土」を見る世界であり、古くは山鹿素行の水土論に通ずるものがある。原日本人といわれる縄文人の民族性の中に樂浪文化という高度の文化を受容する文化的能力を肯定されている。然も樂浪文化受容の課程の時代と日本の古典古事記、日本書紀、万葉集との間に相当の年代的、資料的ブランクがあるにも拘らず、いや資料的ブランクはその方面的の學問の未熟や研究不足にもその原因があると思われるが、それにもかかわらず樂浪文化流るの課程を暗示するものとして「此の事情をそれとなく語っているもの」として日本の三大古典をあげている。「史料の不連續性」の中での「歴史の連續性」の基本的認識が見られる。東洋史家には珍らしい日本古典への理解の仕方である。

装飾古墳珍敷塚の示す壁画構成、それは空行く天鳥船であるので、日月を配し蕨手は雲海を表示している。それは海洋生活者の生活体験から生まれた天翔ける被葬者の死生觀であり、絵画という形式による古代人の心から生まれた宗教藝術である。柿本人麻呂の作は和歌という文学形式をとっているが、空は海、雲は波、月は船であつて、無限の彼方、宇宙の涯にある銀河の世界に消えて行くという壮大な自然觀、宇宙觀であつて、この絵画と詩の間にはたしかに2世紀にわたる年代の落

差があるが、内容的思想的にはそれを感じさせないものがある。この2例をあげたのは私個人の考え方であるが、こうしたものを駒井博士は「それとなく」その事情を語るものと言われたのであろう。

かつて日本考古学協会会長の藤田亮策博士が私に「考古学も神話もそうたいした差はないよ」とさりげなく話されたが、当時は多少のとまどいを感じながら聞いたのであるが、今では年齢のせいか、博士の学問的心境が理解される様な気がするし、その翌年「神話の島」沖の島の考古学的調査を実施した。

それにしても近来日本の古代史を東アジア的視野で見ることが如何にも近代的な新しい日本歴史の見方のようにいう傾向が特に強調され、その先駆者の代表として津田左右吉氏や戦後には自ら津田学説を継承すると自称する家永三郎氏、又は江上波夫博士の所説のように古事記、日本書紀の神話伝承を虚構として日本古代史を断絶する学者が輩出している。それは学究の自然の帰結としての学説というより、学問以外のものの為にする意図的なものと思われる場合が少くない。こうした学風の中にあって駒井博士が楽浪文化受容の繩文人の能力性の根源を「万葉人に見るような清潔な心が大きな原動力であったに相違ない」と結論づけられている。国学者本居宣長が古事記の研究に生涯をかけた古事記伝の中で、日本民族精神に到達して「^{すがすが}清々しき御国心」として把握したのと規を一つにしている。18世紀の国学者と20世紀の東洋史家との間には真理の探究に於て差はなかったのである。

六. 結 語 — 楽浪文化流るの現代的示唆と歴史の非情 —

楽浪文化流るは古代日本にとって、単に先進文化地帯楽浪からの高度の文化の流入だけの問題ではなくて、それを受容しつゝ古代日本の国作りを併行して行って来たのであるが、20世紀の今日では、日本はトインビーの説くヨーロッパ文明の周辺文明の立場を止揚して、世界の新たなる中心アメリカ文明の良きライバルとして挑戦している。

一方かつての楽浪文化を誇った韓国は今日幾多の苦難を克服して、新たなる20世紀の国作りをしているが、今は文化の先進地帯である日本の協

力が必要であるし、現に行われている。日韓間の長い歴史からいえば、相互の利害の対立や抗争の期間は短かいのであるが、偶々20世紀にそれが起っていることが互に苦渋と怨恨の情を高めた結果をもたらしている。そうした原因を作った政治軍事の指導者達の大いなる過誤はとがめられべきであり、又民族的反省も為されなければならぬが、その事のみによって20世紀の今日を生き、明日を生きる事が出来るかが問題である。ここで私はドイツの哲学者カール・ヤスバースの言を引用してみよう。

「ぎりぎりの所では信ずることの出来ない國に國民的生存の保護を求めるることは堪えがたい事であるが、此の事實を見るのは盲目であるし、又それがないかの如く行動することは狂氣である」とその著書「西独逸よ何処へ行く」の中で述べている。たしかに39年前は米独の関係は、共に天を載かざる敵対関係にあった。然も独逸は不幸にも國家は東西に分断されるという悲運の中にある。その上西独逸国民の生命財産の保護は、アメリカ国民の意志とアメリカ軍の動向にかかっている。万一の場合、米独の間には防衛条約はあっても要するにそれは一通の文書であって、実行の有無は一方的にアメリカ国民の意志にある。このシビアな事實を直視しないのは全くの盲目であるし、それがないかの如く反戦、反核運動を展開するに至っては狂氣の沙汰といわざるを得ないというのがヤスバースの言である。そしてこの事はそのまま今日の日本にも韓国にも通じていえるのである。日本にとって39年前のアメリカは日本最大の敵国であったが、今日アメリカなくして日本の独立はあり得ないし、アメリカなくして日本経済の繁栄はない。然るに日本の現実はアメリカの核の傘の保護下にありながら、非核三原則を盾にしてアメリカ艦隊の核武装入港を認めないし、その上安保条約を締結しておきながら米軍基地を撤去せよの、非武装中立論であり、日本領土であるクナシリ、エトロフ島のソ連軍の増強には一言の要求も、四島返還運動もしない。日本はまさにヤスバースの言の如く盲目と狂氣の乱舞する社会である。

韓国にとって35年に及ぶ日本の植民地支配の怨恨は忘れ去ることの出来ない深い怨念があるのであるが、その韓国も現在を生き、明日を生き残るために恩讐を越えて日本と結ぶことは必須の条

件である。私が激動の今日、楽浪文化流るをテーマとして取り上げたのは韓半島からの高度文化の移入なくして日本の建国は促進されなかつたであろうという駒井博士の提言に深い感銘を受けると共に、私は日本文化の流入なくして韓国の国作りは促進されないと敢えて提言するのである。それこそが楽浪文化流るの現代的示唆である。

日米間に、日韓間に、過去に如何なる怨恨や怨念があろうとも、日、米、韓三国が「今日を生きて行くために」「明日に生き残るために」吾々は一切の過去を止揚 aufheben して行く外に、日、米、韓に運命の共同体 gemeinschaft を作る他に道はない。この道を逸脱することは戦争への道であり、国民的生存の破滅の道である。それはヤヌペースの言う盲目と狂氣の社会から脱却する道で

ある。私の小論、楽浪文化流るは韓民族にとって過去の栄光と自信を回復してもらいたいし、わが日本の同胞には悔い多き歴史の教訓をかみしめて深い反省を求める。今や日本は韓国に向って楽浪文化流るの回流として心から協力すべきであろう。然し僅か半世紀の歴史の流転の中にあって、歴史の非情の流れの中にあって、止める如何なる手段もなく唯ひたすらに流れ去った幾十万、幾百万の若き魂に何と申しひらくことができるであろうか。潮風の最涯の宗谷岬に立ち、摩文仁ヶ丘の黎明の塔下に立って、昨日の敵を唯一の友として生き抜く以外に道のない歴史の非情に、歴史家としての業の深さを今更らの如く感じさせられたのである。楽浪文化流るのテーマの示唆する教訓は「歴史の非情」の一語につきる。



珍敷塚古墳の石室奥壁（福岡県吉井町）

投稿原稿を受付けています。

また、皆様のご意見・ご感想を、右記宛お寄せ下さい。

国際ハイウェイプロジェクト
日韓トンネル研究会

〒150 東京都渋谷区道玄坂 2-10-12
新大宗ビル 3号館 930号室
TEL 03(496)9211